ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.8

豊後高田の石橋

豊後高田市教育委員会

はじめに　～九州は“石橋の宝庫”！～

■石橋の現存数“日本一”を誇る大分県

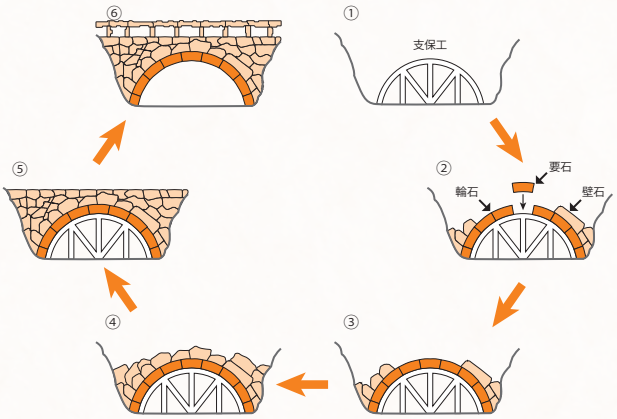
中島川に架かる「眼鏡橋」（国重要文化財）
［画像提供：長崎市］

日本に残っている石橋のうち、実に９０％以上が九州に存在します。また、九州の中でも大分県・熊本県・鹿児島県の３県が特に多く、大分県における石橋の現存数は約５００基で日本一を誇ります。日本最古の石造アーチ橋は、１５０２年に造られた沖縄県那覇市の「天女橋（てんにょばし）」がありますが、これを除くと長崎市の中島川（なかしまがわ）に架かる「眼鏡橋（めがねばし）」が九州最古の石橋とされています。眼鏡橋は1634年（寛永11）に、興福寺（こうふくじ）の2代目住持（じゅうじ）である中国僧・黙子如定（もくすにょじょう）によって架けられたと伝わっています。

長崎の眼鏡橋を契機に、日本の石造アーチ橋の架橋技術は飛躍的に発展・普及しました。特に九州ではその動きが目覚ましく、江戸時代～大正・昭和時代にかけて各地で優れた石橋が次々と造られました。その背景には、橋を必要とする急峻（きゅうしゅん）な地形が多かったこと、適度な強度と加工しやすい石材（凝灰岩（ぎょうかいがん）など）が広く分布していたこと、石を加工して積み上げる優秀な職人（石工）が多く居たことなどが要因として挙げられます。

■石橋のつくり方

石橋（石造アーチ橋）づくりの最初の工程は、「支保工（しほこう）」というアーチ部分の石を支えるための柱を組み立てます…①。支保工が完成すると、両側から順に輪石（わいし）（アーチ石）を組み、その上に壁石（かべいし）も積んでいきます…②。最後に頂上部分で要石（かなめいし）を組み合わせます。支保



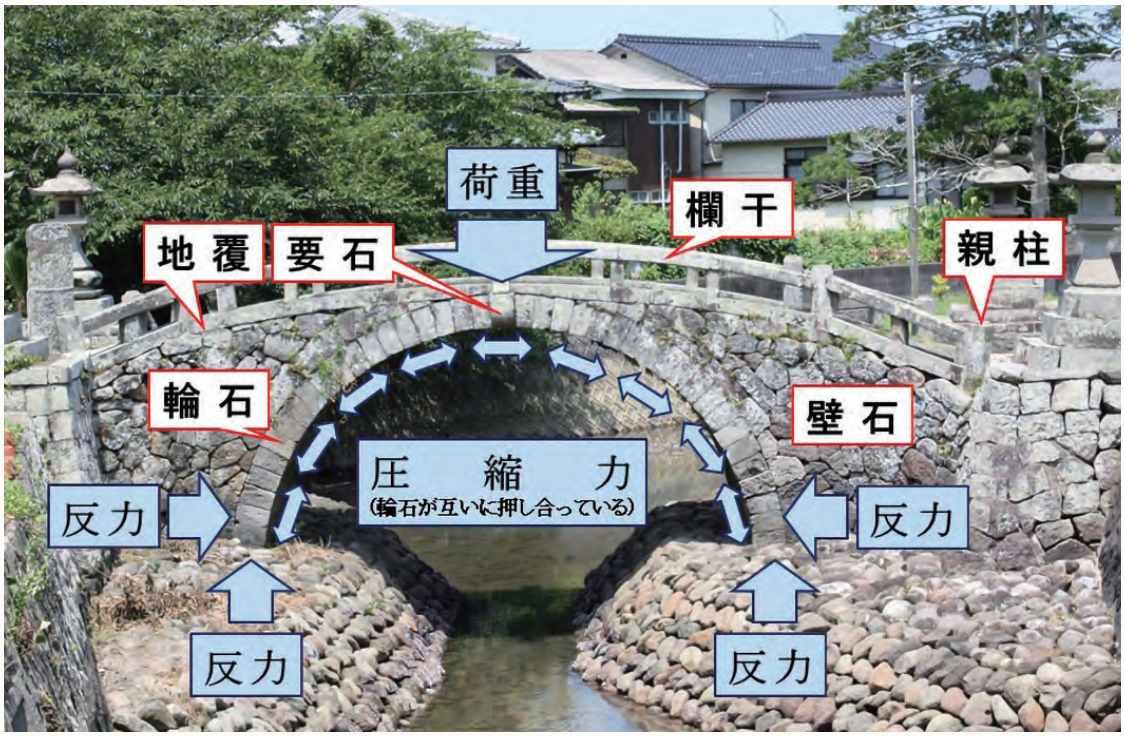
石橋（石造アーチ橋）の作成手順
［澤村・澁谷（2011）より転載］

工を少し緩めてアーチを自立させると、輪石が音を立ててしっかり噛(か)み合うといいます。全工程の中で最も緊張する一瞬です…③。その後は、輪石の上に残りの壁石を積み上げていき…④、壁石が積みあがったら一応の出来上がりとなります…⑤。支保工を撤去して、必要に応じて橋の上の欄干(らんかん)などを設置して完成です…⑥。なお、支保工は大雨などに備えて、③の段階で早めに撤去する場合もあるようです。

■石造アーチ橋のしくみ

石橋は木橋のように腐朽(ふきゅう)しません。石材の使用によって高い耐久性が得られていることはもちろんですが、アーチと呼ばれる仕組みによって構造が安定していることも大きな特徴です。アーチとは弓状に弧を描いている部分のことで、古代ローマの水道橋や中世ヨーロッパの教会建築に見られるように、古くから建物の屋根や橋などを造る構造として使われてきました。

石は押される力に強い材料です。石造アーチ橋では、一つ一つの輪石が互いに「押し合う力」（＝圧縮力）が釣り合うことで、橋全体を安定させています。アーチに上から荷重がかかると、アーチの両端に力が及びます。両端は固い地盤などでしっか



石造アーチ橋のしくみと各部の名称
潮観橋（県指定文化財）

りと支えられているため、反作用として内側に押す力（＝反力）がはたらきます。すると、アーチにかかる力は圧縮力に変換されるため、橋は簡単に曲がったり、たわんだりしません。

石造アーチ橋は一度架設すると、維持管理の手間がほとんど無く、相当の交通荷重にも耐えるため、道路橋のほか、水道橋や歩道橋などに使用されてきました。前述のとおり、九州の石造アーチ橋は江戸時代後期～大正・昭和時代前期ごろに数多く築造されました。長い年月を経過しても、当時のままの姿で現存している石橋が多く見受けられ、その構造の堅牢（けんろう）さを物語っています。

鳥居橋（宇佐市所在／県指定文化財／1916年（大正5）造）

■ぶんごたかだの石橋

豊後高田市には、宇佐市院内町や中津市などにある規模の大きな多連アーチ橋は存在しません。しかし、単一アーチ橋をはじめとして、桁橋（けたばし）、方杖橋（ほうづえばし）など様々な形の味わい深い石橋を市内各所で見ることができます。生活道路として使っている（使っていた）石橋もありますが、香々地の別宮八幡社「潮観橋」や、長岩屋の天念寺「無明橋」など、神社への参道であったり、僧侶の修行の道であったりするように、神仏への信仰に関する目的で架橋された石橋が多く残っている点が大きな特徴といえます。

今回、市内に所在する主な石橋を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の石橋～ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.8～』を作成しました。本冊子が文化財鑑賞の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会

豊後高田市内の主な庚申塔マップ

潮観橋（しおみばし） 附潮観橋序碑・石灯籠（つけたりしおみばしじょひいしとうろう）

・文化財指定［県指定］　・位置情報【33°40'09.0"N 131°31'29.4"E】

潮観橋

潮観橋序碑

潮観橋は香々地の別宮八幡社（べつぐうはちまんしゃ）の前を流れる八幡川（はちまんがわ）に架けられた石造単一アーチの参道橋です。橋の規模は橋長10.5m、橋幅2.8m、径間（＝アーチ部分の直径）5.7mです。橋のたもとには4基の石灯籠や、架橋の来歴を記した石碑「潮観橋序碑」が残されており、橋本体を含めた一括で大分県の有形文化財に指定されています。

石碑の銘文から、潮観橋は江戸時代後期の1858年（安政5）に橋が造られたことが分かるほか、欄干の親柱（おやばしら）や束石（つかいし）には、世話人や石工の名前が刻まれています。なお、六角形に成形された親柱は、国東地方の石橋に見られる特徴とされています。また、要石の先端を橋の側面より持ち出して、欄干に向けて斜めに石（≒方杖石（ほうづえいし））を添えるという、他の石橋ではあまり見られない珍しい技法を用いています。

潮観橋親柱
六角形の親柱は、国東地方特有の形。
側面には「石工 見目 治輔」の銘が入る。

■石橋撤去の危機を乗り越えて…。

現在では豊後高田市を代表する石橋として、広く市民の方に親しまれている潮観橋ですが、昭和50年代には八幡川の氾濫（はんらん）防止を目的とした河川工事によって、橋の撤去・移設の危機を迎えていました。数年後には工事着工という中で、「潮観橋は別宮八幡社の本殿・拝殿・楼門と一直線の参道上にある、現在の場所に存在していることに本質的な価値がある。」とする有識者らの意見や陳情などを踏まえて検討を重ねた結果、大幅な工法変更によって潮観橋は現地保存することができました。

■潮観橋を後世に伝えるために ～潮観橋欄干保存修理～

2025年（令和7）11月、連絡を受けて教育委員会職員が現地を訪れたところ、潮観橋の欄干部分の石材が親柱から離脱し、落下時の衝撃によって真ん中から2つに折れているのを確認しました。その後、橋の所有者である別宮八幡社から依頼を受けた専門業者によって、欄干の保存修理が始まりました。

親柱から落下した衝撃で2つに折れた欄干

調査の結果、親柱と地覆（じふく）の間には過去のモルタル補修痕が見られましたが、経年によってモルタルが剝（は）がれて隙間（すきま）が生じていました。そのため、親柱がぐらついて不安定になっていたことで、欄干石の落下を招いたものと考えられました。

欄干の破断面にステンレスピンを挿入します

修理作業では、2つに折れた欄干石にステンレスピンを用いて接合・補強しました。また、親柱と地覆の間に施されていた古い補修痕をきれいに取り除いた後、新しいモルタルを再充填（じゅうてん）して、親柱をしっかり固定しました。補修したモルタルの表面は、親柱や地覆が持つ色合いや質感と調和して仕上げています。

接合した欄干を元の場所に戻します

2026年（令和8）3月末、潮観橋の欄干は元通りの姿に戻りました。

[取材協力：株式会社文化財保存活用研究所]

若宮八幡神社石造橋（わかみやはちまんじんじゃ　せきぞうきょう）

・文化財指定
［県指定］

・位置情報
【33°33'17.0"N 131°26'44.9"E】

若宮八幡神社石造橋

正月の「ホーランエンヤ」や、旧暦10月に行われる「秋季大祭（裸祭り）」の祭礼で知られる若宮八幡神社は、アジサイの名所としても有名です。6月には色とりどりのアジサイが咲き誇る参道を進んだ先に小さな石橋があります。橋長5m、橋幅4m、径間3mの石造単一アーチ橋です。

親柱に刻まれた銘文から、1860年（万延元）11月に、大力村の石工・大野壽右衛門によって造られたことが分かります。大野壽右衛門の名は、鼎（かなえ）にある智恩寺の六所権現社の鳥居や、田染横嶺（たしぶ　よこみね）にある岩脇寺の六所権現社の鳥居などにも見られます。大野の詳しい経歴は不明ですが、残された作品から腕の良い職人であったことが予想されます。

保食宮参道石橋（うけもちのみや　さんどういしばし）

・文化財指定
［市指定］

・位置情報
【33°32'04.7"N 131°28'26.0"E】

保食宮参道石橋

佐野の引瀬神社（保食宮）参道に架かる、橋長5m、橋幅2mの石造桁橋です。2つの支点（≒橋台）の間に「桁（けた）」と呼ばれる水平材を架け渡して造るシンプルな構造の橋を桁橋と言います。保食宮参道石橋は5枚の長くて丈夫な桁石によって、橋を構成しています。橋を横から見ると、桁部分の石の厚みは薄く、少し弧を描いて成形されています。参道橋にふさわしい姿にしようと苦心した当時の職人の想いが感じられます。

また、橋のたもとには、こぶし大のホゾ穴が確認できます。江戸時代後期に造られた当初の参道石橋の四隅（よすみ）には、親柱が立っていたものと思われます。

朝平橋（あさひらばし）

・文化財指定
［市指定］

・位置情報
【33°33'14.3"N 131°33'16.7"E】

朝平橋は梅木（うめのき）と加礼川（かれがわ）の境を流れる都甲川に架かる、橋長10m、橋幅3m、径間8mの石造単一アーチ橋です。現在は廃道となっており、すぐ横の一段高い位置に新しい朝平橋が架けられています。1905年（明治38）に造られました。

朝平橋

日枝神社参道橋（ひえじんじゃさんどうきょう）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°37'55.2"N 131°32'15.0"E】

上香々地の長小野に鎮座する日枝神社の神門前に架かる橋長2．6m、橋幅1．8mの小さな石橋です。緩やかに弧を描いた橋の形からアーチ橋のようにも見えますが、下から見上げると太い2枚の桁石が水平に架かっており、石造桁橋であることが分かります。

また、親柱には「宝暦十四」の刻銘があります。江戸時代中期の1764年（宝暦14）に造られたと思われ、市内に残る石橋の中でも屈指の歴史を誇ります。

親柱に刻まれた「宝暦十四」の銘

日枝神社参道橋

戎子橋（えびすばし）

・文化財指定
［市指定］

・位置情報
【33°36'55.9"N 131°33'39.9"E】

戎子橋は、夷（えびす）地区の上坊中（かみぼうじゅう）集落の近くを流れる竹田川に架かる橋長５．１m、橋幅１．８m、径間４．２mの石造単一アーチ橋です。橋のたもとに立つ石碑によれば、１８８５年（明治１８）に夷地区の石工で、法橋位（ほっきょうい）を持つ板井春哉（いたいしゅんさい）ほか１０名の石工が協力して橋を造ったことが分かります。

戎子橋

■法橋位を持つ石工

「法橋」とは、もともと僧侶に対して与えられた位の一つでしたが、中世以降は絵師、仏師、医師など技術の優れた職人や芸術家の称号として与えられるようになりました。

豊後高田では、江戸時代後期から明治・大正時代にかけて法橋位を授かった、「板井系仏師・石工」と呼ばれる職人集団が夷地区を拠点に活躍していました。現在でも市内には、香々地を中心に広く板井系仏師・石工の作品がのこっており、板井春哉が造った戎子橋もその一つです。

板井甚蔵国俊の法橋補任状
文化五年（１８０８年）

■令和６年台風１０号の爪痕（つめあと）

２０２４年（令和６）８月２９日～３１日にかけて、大分県内を横断した台風１０号は、過去に経験したことのない記録的な大雨をもたらし、市内では土砂崩れや家屋の浸水など甚大な被害となりました。戎子橋も大雨で増水した竹田川の濁流（だくりゅう）によって、左岸側の壁石のほとんどが流されてしまいました。

台風１０号によって、左岸側の壁石が流出した戎子橋

■戎子橋を後世に伝えるために ～戎子橋復旧工事～

２０２５年（令和７）６月から始まった戎子橋復旧工事は、大雨によって流出した部材の石を竹田川の川床から見つけ出す作業から始まりました。川の石に混じって、明らかに人為的な加工痕のある石が、戎子橋の下流側でいくつも発見されました。川から引き上げた石材を調査した結果、戎子橋の部材であることが判明したものは再利用し、失われた部分は新材で加工することとなりました。また、再利用した石材の中には、川に流された衝撃で２つに折れた石もありました。これについては、ステンレスピンで接合するとともに、擬石材（ぎせきざい）で亀裂部分を充填して、元の位置に戻しました。

壁石の復旧にあたっては、被害を免れた右岸側の石積みの様子や、被災前に撮影された写真などを手がかりにして、なるべく元通りの姿になるよう、慎重に作業が進められました。壁石の内側にはぐり石（割栗石）と砕石を充填し、その上から転圧を繰り返して積み上げました。路面は被災前と同様に土を敷いて固めました。最後に新材で加工した箇所は、「古色仕上げ」を行って、周りの部材との風合いを馴染（なじ）ませました。

２０２６年（令和８）２月、戎子橋は被災前の姿に戻りました。

[取材協力：株式会社文化財保存活用研究所]

戎子橋から流出した部材のいくつかを川床から発見

壁石の石積作業

路面の転圧作業

安養寺参道橋（あんようじ さんどうきょう）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°30'48.5"N 131°31'07.7"E】

安養寺参道橋

６本の桁石を架け渡している

田染真中（たしぶ まなか）の安養寺入口に架かる、橋長2m、橋幅1．5mの小さな石造桁橋です。6本の桁石を架け渡しています。擬宝珠（ぎぼし）のついた親柱と、装飾性の高い束石を中央に配した欄干が印象的です。1905年（明治38）に造られました。

河内橋（かわちばし）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°31'39.4"N 131°27'48.3"E】

河内橋は、佐野地区の新粥（しんがい）集落に鎮座する河内神社の入口に架けられた橋長8．2m、橋幅2．7m、径間6．3mの石造単一アーチ橋です。輪石など主要な当初材は残っていますが、架橋後に補強や拡幅といった改変を受けています。橋のたもとには親柱が残されており、橋名である「河内橋」と架橋年と思われる「明治四十一」（＝1908年）の銘が刻まれています。

親柱に刻まれた「明治四十一」の銘

親柱に刻まれた「河内橋」の銘

河内橋

堅来八幡社蛭子橋（かたくはちまんしゃ えびすばし）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°38'34.2"N 131°29'52.4"E】

香々地の堅来八幡社境内の蛭子社にいたる橋長3．5m、橋幅1．5m、径間3mの石造単一アーチ橋です。欄干部分はコンクリートブロックで改変されています。

橋のたもとに残された寄進碑の銘文によれば、1859年（安政6）に福神丸幸輔と花屋傳兵衛の寄進によって造られた橋であることが分かります。

蛭子橋のたもとに立つ寄進碑

堅来八幡社蛭子橋

鵯越橋（ひよどりごえばし）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°37'41.6"N 131°31'03.6"E】

鵯越橋は県道708号線（夷堅来線）を堅来川に沿って上流に進んだ途中、堅来と小畑（こばた）地区の境に所在します。橋長6．6m、橋幅2．4mで、石造方杖橋（ほうづえばし）という構造の石橋です。両岸から石材（＝方杖石）を斜め上に突き出し、その上に桁石を架け渡した橋を方杖橋と言います。同じ方杖橋としては、宇佐市の「とくしん橋」が大分県最古の石橋として知られています。

鵯越橋

明治30年代に沿海道路（現在の国道213号線）が開通するまで、鵯越橋を通る道が香々地～高田間を結ぶ主要な幹線（九一の往還道路、殿様道路）であったとされています。架橋の時期は不明ですが、明治時代に造られたものと考えられています。

久保橋（くぼばし）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°36'58.0"N 131°31'09.1"E】

臼野の横山集落を流れる臼野川に架かる橋長7m、橋幅5．6m、径間5．5mの石造単一アーチ橋です。1928年（昭和3）に竣工しました。

大分県では近代に入ると、四角く成形した石を規則正しく積む「布積み」という新しい工法で造られた石橋（3頁「鳥居橋」参照）が増えてきます。

久保橋のアーチと壁石（乱積み）

久保橋

久保橋は昭和時代の竣工ですが、形や大きさの異なる自然石を不規則に積む「乱積み」という、従来の工法で石橋を造っている点が大きな特徴です。

身濯神社石橋（みそそぎじんじゃいしばし）

・文化財指定
［未指定］

・位置情報
【33°35'13.6"N 131°31'38.6"E】

下黒土の身濯神社は旧無動寺跡とされています。現在の無動寺は、江戸時代後期に下黒土から移動したと伝わります。神社拝殿に向かって西側にある石橋は橋長1．6m、橋幅0．5mで、湾曲に成形した2つの石を両側から突き合わせています。

石の内側に「南無阿彌陀佛」と刻む

身濯神社石橋

石の内側には「南無阿彌陀佛」と刻まれています。造られた年代は不明ですが、旧無動寺時代の信仰にまつわる遺構と考えられます。

天念寺無明橋（てんねんじ むみょうばし）

・文化財指定［国名勝］
・位置情報【33°34'50.6"N 131°32'32.5"E】

天念寺無明橋

長岩屋の天念寺は、国東半島に開かれた寺院群「六郷満山（ろくごうまんざん）」の中でも、古くから修行の寺として栄えました。天念寺の背後に高くそびえる岩山と、尾根に架かる「無明橋」は、六郷満山の僧侶たちによって約10年に1度行われる山岳修行「峯入（みねい）り」の行程の中でも、最大の難所として知られています。無明橋は橋長約5．7m、橋幅約1．2mの石造単一アーチ橋で、大正時代に木造橋から、現在の石橋に架け替えられたとされています。なお、橋の名にある「無明」とは仏教の言葉で「迷い」のこと。したがって、心に迷いのある人や、仏への信心がない人が橋を渡ろうとすると、落ちてしまうと伝えられています。

【注意！】 天念寺無明橋及び現地までの道のりは、落石や滑落など大変危険な場所が多いため、関係者以外の立ち入りを原則禁止としています。ご了承ください。

中山仙境無明橋（なかやませんきょう むみょうばし）

・文化財指定［国名勝］
・位置情報【33°36'49.5"N 131°33'19.0"E】

中山仙境無明橋

国の名勝「中山仙境」の尾根に架かる橋長3m、橋幅0．4m、架橋年代不明の石橋です。2本の桁石を両側から突き合わせた簡単な構造で架けられている上に、尾根の高さや橋幅の狭さも相まって、橋を渡るには相当な勇気が必要です。

なお、無明橋を渡らなくても、すぐ横に迂回路（うかいろ）が設けられているので、こちらを利用すれば、前後の通行は可能です。

■「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」シリーズ

「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」は、市内に所在する文化財をテーマごとに取り上げて、豊後高田市の歴史文化の魅力や特徴について、分かりやすく解説・紹介しているパンフレットです。

○Vol.1『豊後高田の城跡』	平成30年度発行
○Vol.2『豊後高田の磨崖仏』	令和元年度発行
○Vol.3『豊後高田の古墳』	令和２年度発行
○Vol.4『豊後高田の仏像十選』	令和３年度発行
○Vol.5『豊後高田の国東塔』	令和４年度発行
○Vol.6『「昭和の町」の建物探訪』	令和５年度発行
○Vol.7『豊後高田の庚申塔』	令和６年度発行

※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内でデータ公開中！
※大分県電子書籍ポータルサイト《oita ebooks（オオイタイーブックス）》でも閲覧可能！

詳しくは

ぶんごたかだ文化財ライブラリー　検索

【参考文献】 宇佐市編（2014）『宇佐学マンガシリーズ③ 石橋王と呼ばれた男 松田新之助』梓書院／大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（1983）『国東半島の石工Ⅰ』／大分の石橋を研究する会（2000）『おおいたの石橋』／岡崎文雄（2007）『大分の石橋探訪 Vol.1 はじめに』オオイタデジタルブック／岡崎文雄（2007）『大分の石橋探訪 Vol.18 豊後高田市（1）』オオイタデジタルブック／岡崎文雄（2007）『大分の石橋探訪 Vol.19 豊後高田市（2）』オオイタデジタルブック／香々地町誌刊行会（1979）『香々地町誌』／片寄俊秀（1996）「九州の石橋 その魅力と謎をめぐって」『FUKUOKA STYLE Vol.14 [特集]石に聞く～九州の石の文化』福博綜合印刷㈱／澤村康生・澁谷容子（2011）「昔の技術でやってみました！ 第1回 熊本の石工に迫る！伝統的石橋技術（前編）」『土木学会誌』96巻1号／田村卓夫（2006）『大分の石橋物語 潮観橋物語』オオイタデジタルブック／豊後高田市教育委員会（2013）『豊後高田市の文化財』／豊後高田市教育委員会（2016）『六郷満山寺院群詳細調査報告書』／山口祐造（1992）『石橋は生きている』葦書房

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.8
『豊後高田の石橋』

発　行：豊後高田市教育委員会文化財室
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp
発行日：令和８年３月31日発行
印　刷：有限会社 宗印刷所
表　紙：潮観橋